

哲学史と哲学の区別は哲学系アカデミズムのなかでしばしばなされる。哲学の論文を評価する際に、つまりそれが哲学的であるかないかが問題になる際、この区分が参照されているように思われる。哲学史と哲学の区別が自明視されるのではなく、問題として浮上する前提には、この区別が孕む力があるのではなからうか。

これからディシプリンを身につけようとする若手研究者にとって、この問題は悩ましい。ある哲学的問題の哲学史的背景をおさえることと、その問題を哲学的に深めて考えることの狭間で、いったいどちらに軸足を置くべきなのか、発表者はよく悩んだ（でいる）。

実際には、哲学史的だが哲学的な研究も数多くあるはずである。ではどんな研究が模範となるのか。すぐに事例を挙げて哲学史研究の擁護を求められそうだが、本発表はまず、「哲学史」研究とは一体どのような研究を指しているのかについて考えてみたい。「分析哲学」、「哲学史」、「現代思想」を比較するという企画趣旨に貢献するには、そもそも「哲学史」が意味するところをはっきりさせておく必要がある。

具体的には、以下のような素朴な疑問を検討してゆき、「哲学史」（研究）が意味するものを多少なりとも明確にしておきたい。「哲学史研究」はいわゆる「誰々研究」と異なるのだろうか。「誰々研究」が「哲学史研究」に意義を認めても、「哲学」はやはり「哲学史研究」を認めないのだろうか。「哲学史」研究には、哲学的には評価されない要素が含まれるのだろうか、あるとすればそれはなんだろうか。文学史、美術史、科学史、さらには歴史研究一般と哲学史研究は異なるところがあるのだろうか。哲学史研究が哲学から批判されるのは、哲学がそもそも歴史研究に価値を認めていないからなのだろうか。ざっくばらんに言えば哲学史研究のいったいなにがダメだとある種の哲学研究者は考えるのか。

発表者のスタンスをあらかじめ申し上げておくと、以下のようなになる。そもそも歴史的になにか新たな事実を発見することによって、あるいは事実を発見するわけではないが、事実の読み方によって歴史が別様に見えることが、哲学的な体験である。発表者自身はつねに「哲学研究」をしているつもりであるが、歴史的な事情に引かれるのはこうした哲学理解と、歴史理解があり、人間にとって哲学的体験としての歴史理解がきわめて大切なものであると根本的に考えているからだと思われる。

以上を踏まえた上で、方法論、評価基準、教育可能性について検討してゆく。方法論、評価基準については、発表者が普段実践しているものを改めて見直す機会としたい。教育可能性については、まずディシプリンとしての成立条件一般を他の学問と比較しながら考察し、その上で教科書のあり方、研究者再生産など具体的な問題に入ってゆきたい。